

名人 藤田 哲夫(72) 岐阜県吉城郡河合村
聞き手 原 尚貴 長野県岡谷南高等学校2年
平成15年取材

数少ない 搬出技術習得者の話

I 冬場の木の運搬 手轎

1. 木を切る

手轎は伐採した材木を運び出すのに冬の雪を利用して、雪の上を轎を滑らして木をおろすためにできたんやさな。全盛期は昭和の35年か、それより前あたりやつたかなあ。

まずは道を作るんや。河合村は豪雪地帯で、平均1.5m〜2mくらいの固い雪が積もるもんで雪をどけながら轎を滑らしていく道を作っていくんや。勾配が急な所は道をジグザグに作っていくて、途中に邪魔な木とかがあったときは根元から切ってしまうんや。道幅は3〜4mくらいで、足で踏み固めていくんや。雪の上を歩くときには足にカンジキっていう履物を履くんや。

それから次は木を切るんやけど、昔はチェーンソーとかなかったもんで、一本倒すのにも1時間ぐらいかかるんや。切る木はブナ、トチ、ナラとかなんかやな。切る時はまず木に受け口つてやつを作つて、それで倒れる方向を



手轎(てぞり)による運搬

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となつている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、23名の「森の名手・名人」がいます。

この「森の名手・名人」を「森の聞き書き甲子園」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。

なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

うになつてくるんや。そうだったら「目立て」

つていつてアサリを出すようにするんや。歯を広くして切り口を広くすると切れていくというわけや。これがうまくできる人とできん人では切り口が違うんやな。下手な人つてのは、ひつかつたりして真つ直ぐに切れないんや。今はチェーンソーやけど、昔は一つ一つにどえらい技術が要つたんや。木つてのは冬が一番切るのにいいんや。春から夏には木の中に水が入つたり中に虫がいたりするもんで、使えるような木でないんや。根元から1mくらいが一番いいところで価値がある。そやもんで雪があつてもそれをどかして木を切つたんや。

2. 木の積み込み

轎は木で作つてあつて、裏にトタン板(鉄板)が貼り付けてあるんや。そこに滑りやすうするのために灰を塗つて磨くんや。そんでそれをかついで山に登つて行くんや。重さは40〜50kg位あつて結構重いんやけど、それを一人一つをかついで登つてくるんや。かつぐと重いん

で、背中を痛めんように、わらでかく編んだネコガイをつけて背負うんや。これがショックを吸収してくれたらして、運ぶのが楽になるんやさな。

それから手轎に木を積むんやけど、その時トビつていう道具を使うんや。これは先がとんびの口のように尖つとつて、それを木に打つて材を移動させるんや。転がしたり、横へやつたり、いろいろできるんやさ。重くて手では動かせん木でも、このトビを使うと簡単に動かすことができるんや。すこいやろ? 大きい木とかもあつて、そういうときは「そりや」ってかけ声をかけ合いながら少しずつ手轎に乗せていくんや。大きい木から順番にバランスよく積んでいくのが大切なんや。

3. 運搬

一回に1.5〜2トン位の木を運べるんや。こんなに重いものを一人で運んでいくんや。これはスノーボードみたいなもんで、角を立てればブレーキがかかるんや。そやもんで、スノーボードに手をつけて荷をつけたという感じで見てもらえれば一番いい。轎の通つた後を見ればボードで滑つた跡とおんなじ感じやな。斜面に沿つてズーとやつていくと滑つていつて、轎を手前のほうに立てるとグッとブレーキがかかるっていう感じやな。斜面でないところは横にしてダーツつて結構早いスピードで行つてまうし、斜面ではグッ、グッ、グッつて一歩ずつブレーキをかけながら降りてくるんや。バランスをとるのが難しいもんで、途中で落としてまうこともあるけど、結局は慣れやな。土場の近くまで運んできたら、轎の下に木をさして、てこを利用して掛け声をかけて一気に土場に落とす。落とした木はトラックで製材所へ持つて

いくんや。一連の作業はこんな感じで、これの繰返しを一日に3回とか、距離によって4〜5回やるんやさ。

II 春から夏の運搬 木馬

1. 道作り

木馬は特に季節を問わんかわり、轎の通り道となる場木(↑枕木のこと)を敷く道幅のあるところに限つてやつたんや。

まずは山に入つて、伐採に向かうんや。河合村はほとんど広葉樹で、ブナやナラの木が生えとるんや。林に入つて、木馬道作りに使う手頃な大きさの細木も切っていくんや。

木の大きさは10cm位の太さの木を1.5m位に切つて使うんや。いい木を見つけたら伐採やな。これも切り方は手轎と一緒にや。そして倒した木を鋸で7尺2寸に切りそろえるんや。

一通りの伐採が終わつたら、木馬の道作りに入るんや。

木馬を引くには木馬の下に敷く枕木が必要で、その上を滑らして降りてくるんや。これは線路の枕木みたいな感じや。土を軽く掘り、3分の1程埋めていくんやけども、それが真つ直ぐでないとうまく滑つていかないから高さを均一にしなあかんや。そしてその作業を材木の集積場まで埋めていくんやけど、どえらい根気のいる仕事なんや。そんで枕木を埋め込み終えたら、次はカセつていつて轎の方向を誘導し、横滑りを防ぐ役目をしてくれるものを轎の幅より少し広めに並べていくんや。そしてだいたいの調整ができたら、手斧の頭を使ってそれを釘で固定していくんや。ここまで終わると線路みたいな具合になるん

やな。すべりをよくするため、ナタで木のこぶや皮をそいで、場木の高さをそろえていくんや。そして最後にカーブのところワイヤーを2ヶ所とりつけるんや。これは轎が飛び出さんように動きを直線的にさせたり、木馬を固定するために使われるんや。主には、はみ出さんようにするためや。ワイヤーは直径1cm位の太いワイヤーを使つて、それをくいに輪三結びにして伸ばしていくんや。くいは「あいかけ」つていう木製のハンマーで深く打ち込んで、だいたい打ち込んだらそれを枕木の高さに切りそろえていつて、それを集積場まで打ち込んでいつて道が完成するんや。

2. 運搬

道が完成したら木馬を担いで山を登っていくんや。これも40〜50kgくらいあるな。上まで運んだら木を積むんや。トビを使つて息を合わせてかけ声をかけ合つて乗せていくんやけど、そのときに一番大きくて安定しとる木から乗せていくんや。手轎とは違って、木を横でうて縦に積んでいくんや。木は曲がつておつたりしたらそれをうまく整えて、バランスをとつていくんやな。一番神経を使う仕事かな。乗せていくときにカスガイで木を一本一本全部固定するんや。一人が上に乗つて材を引き上げるんや。そのとき全体が六角形で、上下、左右均等に積むことでたくさん木が運べて、バランスがいいんや。これで一回に20位運べるかな?

木馬の前に木が突き出しておつて、これを舵棒つていうんやけど、これがハンドルの役目になるんや。これにワイヤーを巻きつけてブレーキにするんや。このワイヤーは、上のほうに釘を打つて止めてあつて、それを木馬の裏から



木馬(きんま)により搬出する藤田さん

III 山に対する思い

昔の人たちは山と触れ合う中でいろんな生きていく知恵を学んでいつたんや。今の若い人たちはそういう知恵がほとんどなくなつてきとるので伝承していかねえかと思ふんやけどな。そうせんと生活の知恵がなくなつてまうやろ。わしたちは雪の中でもマッチさえあれば火が起こせるんや。どんなに世の中が便利になつていつても森から縁を切ることはできんと思ふんやさな。そこに気付いてもう一度目が向けばいいな。都会が発展していく中で地方を切り捨てていつてしまつて、自然と付き合うことを忘れたやろ? 今都会に行くと自然がなくても生きていけるという錯覚に陥つてしまふし。今林業は造林や保育にお金をかけるだけの期間なんやさ。我慢の時代や。お金をかけても赤字やもんで誰もやりたがらんけど、これが大切なんやさな。やつぱ国でも保育に力を入れて欲しい。税金が余計に取られるけども、これはやつていかなあかんと思ふな。本当に自然はいいもんやと思ふ、自然と親しまないつていうのは本当に損やと思ふんやな。だからわしは何にもない時代に自然に触れながら育つてきたことに、今考えると本当に充実しとったなあと思ふるな。

名人 藤田哲夫さんのプロフィール

現在岐阜県飛騨市河合町の森林組合で森林の保育の仕事をしている方で、7人兄弟の長男として生まれ、子どもの頃から自然に携わつて育つてきました。手轎・木馬という道具を使い、山から木を運搬する仕事をしていましたが、機械化が進むにつれその仕事はなくなつていき、現在はそれをやるのが全くなかつてしまつたらしいです。

【社岐阜県緑化推進委員会 佐藤正吉】